

【福島大学むらの大学アーカイブ 11】【南相馬 Chapter 6】

「楽しいから交渉する」

—小高の闘う農家、三浦広志の震災復興の軌跡—

NPO 法人 野馬土 代表 三浦広志さん



インタビュー日時：2023年9月26日（火） 11:00~13:00

2023年11月19日（日） 14:00~16:00

インタビュー場所：三浦さん農場・事務所

聞き手： 学生：平井胡桃、照井楓真、小池美輝、樋口沙梨、久保田彩乃

プロフィール

1959年9月28日生まれ（インタビュー時63歳）南相馬市小高区井田川生まれ育ち。福浦小学校、小高中学校福浦分室、原町高校を卒業後、岩手大学農学部畜産科を経て、実家の農業を継ぎ、住民票は小高区に置いたまま新地町に避難。現在は妻と2人で暮らし、同じ敷地内に息子が住んでいる。

NPO 特定非営利活動法人野馬土代表理事を務めながら、2023年度から福島大学大学院食農科学研究科に入学し、アグロエコロジー（農業生態学）の研究を行っている。

1. 震災前の三浦さんの半生

—震災前、元々ご実家で農業をされていたんですか。

三浦：農家なんだけど、先祖代々ではないです。うちの父は東京の三軒茶屋生まれで、小学生の時に第二次世界大戦で、福島の川俣辺りに疎開して来ていたらしいです。戦争が終わって、東京に戻るかどうかという選択の時に、サツマイモのつままで食べるくらい相当飢えたらしいんです。うちの母系の先祖はここに入植した移住者で、特殊な農家なわけですよ。ここの農地は元々海だったんです。船を田んぼに浮かべたり、苦労したらしいです。船に手で刈った稲を載せていく作業をやったようなところだったんです。使った船は会津の博物館（福島県立博物館）にあります。農業を始めたのは、小作人が逃げて空いてた農地に入ったからだそうです。家に帰ってくると東京弁を話すじゃないですか。ディープな相馬弁は理解できずいじめられたこともありました。

★農業を継ぐきっかけ

—ご実家の農業を継ごうと思ったのはいつですか。

三浦：高校2年の時ですね。特に高い志もなく、継ぐっていう感覚もなかったんですよ。将来何をやっていくかを考えた時に、一番に思い浮かんだのが、落語家ですね。ずっと楽しそうにしゃべり続けてるのが良かった。でも、美味しいものも食べたかったんです。当時実家で、豚飼ってたんですよ。なので、とりあえず（大学は）獣医科を受けてみた。でもさすがに獣医科は倍率が高くて、滑り止めに受けた畜産科で。一応、獣医科は落ちても畜産科だと首位だったんですよ。獣医科落ちたから「行くのやめようかな」って言ったら、「いや、せっかく受かったんだから行け」って言われて、4年遊ぶのもいいかと思って行きました。落語家とか、弁護士とか、そういうしゃべる仕事がいいなと思ってたんだけど、農業やらなきゃ。やっぱり、俺にとってはおいしいものを食べてる時が一番幸せを感じるの。うちの親父から飢えた話とかいっぱい聞いてたから俺はちゃんと安定したおいしい食べ物を食べるには、作らなきゃ駄目だろうと思って。それで、じゃ農業をやろうと決めて、農学部に行くことにしました。

★震災前の農業

—大学卒業後、すぐにご実家に戻って農業をされたのですか。

三浦：はい。当時、実家で飼っていた豚が800頭ぐらいたんですよ。その管理を任されていた。最初、田んぼはやる気なかったんです。（米は）親父がやるから、「お前は豚だけやってろ」と。畜産科出たんだから、みたいなね。僕、26歳で結婚したん

ですよ。うちの親父はあまり働かない人で、農協や水利組合の役員とかになって遊び歩いてる人だったので、食えないじゃないですか。だから、ちゃんと食べるようにするために、経営も26歳からは全部、引き継ぎました。独学で税務署との交渉をしたりしながら経営もやってました。あと豚飼っている時、JAがブランド豚をつくるのか言って一頭一頭全部データを取っていました。しかし、僕が豚をやめる時までには、ブランドはできてませんでした。

—開発途中だったんですね。

三浦：そうです。でも、当時豚飼ってて一番面白くないのは、輸入した穀物を食べさせて、豚熱のワクチン抗生物質の注射を自分で行うことでした。医者でもない、獣医でもないのに。輸入穀物には、防カビ用の殺菌剤や殺虫剤が振りかけられているし、餌には抗生物質が混ざってるんですよ。僕、農薬や化学物質に非常に敏感で、農薬撒けない人なんです。除草剤をまくと吐き気がしてずっと止まらなくなります。殺虫剤撒くと倒れます。ほんとに農業向きじゃない体だって言われてたんですけど、合わないんだなっていうのが分かったので、できるだけ農薬を使わないような農業をやらなきゃと思いました。でも田んぼの面積が大きくなってくると除草剤だけは撒かなきゃならないんです。除草剤には袋に入って投げると広がるやつがあるんですよ。それを投げたら、すぐに逃げる。だから、有機農業を勉強しなくてはいと思いました。

—昔からお米を作られていたのですか。

三浦：そうです、お米です。ここは元々海なので、海拔マイナス1メートルなんですよ。だから、米しか作れない。大豆や小麦を作ると、途中で根腐れを起こして収穫できなくなるっていうか、育たないんですよ。野菜とかも、埋め立てないと無理です。

—震災前の三浦さんの農業に対するお考えはどのようなものでしたか。

三浦：『安全・安心・おいしい』をテーマに米作りをしていました。農薬や化学肥料を使わないようにしないといけないと思って、有機質肥料中心の栽培をしていました。「土の中で生きてる微生物や生き物との連携が一番おいしいものを作る」と考えて、自分が納得して農業をやれることが重要だと感じていたので、そうしましたね。

—ご実家の農家の経営を引き継いだ後、すぐに有機農業を始めたのですか。

三浦：そうですね。畜産科だったので「有畜複合経営」っていうのをやりたくて。津波で流れましたけど。31歳で米の産直をやることになったんですが、うちの納屋に精米機を置いてやってたので、ハエが入ると困るんですよ。だから、豚はすっぱりやめて、米を中心にしました。ちょうどその時に米が自分で売れるようになったんです。それまでは農協にしか売っちゃいけない法律になってて駄目でしたけど、これからは自

分で売れるってことになったので、それ以降、米を一俵も農協に売ってないです。やっぱり自分で売ってという風になってくると、米の作り方とかも変わってくる。売るのは適性があると思っているので、自分で作って自分で売るのがって消費者の心もつかめますよね。

産直グループもすぐに大きくなって、それは最初、生協との野菜の産直から始めたんですよ。その次の年に米が売れるようになったので、米も販売をするっていう感じですよ。1992年だったかな。「農事組合法人浜通り農産物供給センター」というのを作りました。最初はJAから資金を借りていたのですが、嫌がらせでどんどん金利を上げられたので農林中央金庫というJAの金融の中央組織が東京にあるんですけど、そこから直接資金を借りて産直事業を伸ばしていました。

—有機農業では米以外にも栽培されましたか。大変だったことはありますか。

三浦：農薬を使わずに、ネギとか、ホウレンソウとかをメインで作ってましたし、当然アイガモを使って無農薬のお米も作ってました。

野菜も米も天候に左右されたり、失敗したりすることはよくあります。だから諦めを良くして、あまりよくよしないようにする。駄目になる時はもう全滅したりするんですよ。だから、それはもうそういうもんだと。それで今度は違う方法を試してみたりしていると良くなってきます。そこで諦めちゃうと、やっぱり農薬使った方がいいかなとなっちゃうから。例えば、殺虫剤を使うと虫を食べる虫が死んじゃうので、また一からやり直さなきゃならないから。だから、諦めてリセットする思い切りが大事なんじゃないかなと僕は思っています。

2. 震災後の小高

—ここ（お話を伺った事務所がある一帯）はもう、津波の被害を受けた場所なのですよ。

三浦：そうです。そこに宮田川っていう川があるんですけど、地震と津波でその水門が落ちちゃって。震災後1年4カ月間、200ヘクタールぐらい、ここは湖みたいな状態だったんですよ。ずっと放置されて。みんな原発事故で避難したから、どうにもならなくて。翌年の4月15日にここの警戒区域が解除になって、入れるようになってから、色んなところからポンプを集めてきて、海に直接放出し始めて、7月か8月ぐらいに一応水がなくなったという。

—ここは、震災前は何世帯ぐらいあったのですか。

三浦：この井田川という集落には約60世帯がありました。

3. 震災発生から避難までの体験

★「400人並んだところに、地震がきたんです」

—2011年3月11日、どこで何をされておりましたか。

三浦：相馬市のはまなす館にいました。税金申告の日で、私たちは毎年デモ行進をしながら税務署に行って、みんなで（申告書を）一斉に出しておりました。これは日本の所得税は自主申告なのに経費を認めないとか言われるのがいやだったので。その日は、例年通り400人ぐらいでデモ行進をしていくという予定になっておりました。はまなす館の中でいろいろ打ち合わせしたり、集会やったりして、それが終わった頃に地震が起きたんですよ。14時45分がデモ行進出発予定だったんですけど、地震が来たのが14時46分でしょう。だから相馬市のはまなす館の外にずっと400人並んでいたところに地震がきたんです。

私は（はまなす館）中で椅子片付けやってたら、もうすごい揺れが6分ぐらい続いたんですよ。私は必死になって壁につかまっていけないという状況で。やっぱ（気が）動転してるんですね。揺れが収まった後、机と椅子を片付けようと思いましたからね。施設の人に「もう片付けなくていいですから、早く出てください」とか言われたんですけど、外に出たら液状化でアスファルトが割れて下から水がバースと噴き出してきてました。さてどうするっていう話になって、みんな「どうする？」って俺に聞くんですよ。でも、ここでばらばらになると大変だから、取りあえず決めてたし「デモ行進しようぜ」とか言って、そのまま400人でデモ行進して税務署まで歩きました。車道を歩いて行ったので、脇に歩道があり、そこには塀が倒れてたり、子どもとかおばあちゃんたちが座り込んでたりして、「あんたたち、よく歩けるわね」とか言われながらずっと歩いていきました。

相馬税務署に行ったら、例年（申告の受付は）ガレージでやっているの、とりあえずできると。「ほんとにやるんですか。税務署の中、ぐちゃぐちゃなんですよ」って総務課長に言われて、「せっかく来たんだから、もうしばらくできないから、受け取りのはんこだけ押してくれ」って言って、余震が続く中30分ぐらいで受け付けてもらいました。待っている間、携帯がなかなかつながらないんだけど、1人1回ぐらいはつながるんですよ。そしたら、「もう津波が来てる」とか、「あそこは駄目だ」とか、「もう帰ってこなくていい」とかいうのがどんどん入ってきてました。400人いるから情報が集まってくるわけですよ。それで、その情報を共有して、それぞれが税金の申告終わったら別れていくっていう感じでした。孫を迎えに行くって言って帰った人が1人いたんですけど、その人は津波にのまれてるんですよ。生きてましたけどね。だから、（デモ行進は）翌年もやったんですけど、交通規制の警察の人に「去年、迷惑かけて済まなかったね」って言ったら、「いや、いい判断でした」って警察

の方に褒められました。

★その後、三浦さんは福浦小学校で家族と再会し一夜を明かします

—ご家族に連絡がついたのはいつだったのですか。

三浦：帰る途中で電話が1回だけ妻につながって、「福浦小学校に避難してるからそっちに来てくれ」って言われた。小高の踏切付近までは車で来れたんだけど、途中から津波で周りが湖になってたので、しょうがないから津波の水辺のあぜ道をつたって行ったり、山の木に絡まっているつるをつたって登っては下りして。最後はもうぐちゃぐちゃでしたけど、(国道)6号線の歩道を歩いて福浦小学校まで行った。真っ暗だったから家族は会えないな、探せないなとか言ってる。でも、トイレで待っていれば来ると思って待ってたら、本当に来て、そこで会うことができました。

—その日の夜はどう過ごしましたか。

三浦：車1台に家族5人で毛布をかけて温めあっていた。エンジンをかけて暖房を入れ、温まったらガソリン節約のためエンジンを切る。これを繰り返してましたね。

★3.12「ああっ、原発あったな。近いよな」

—原発事故はどのようにお知りになりましたか。

三浦：姉家族が浪江にいたので一応安否確認をして、避難所に戻ってきました。私の家は残っているみたいでした。そこの橋に(自宅近くの橋)来たら、人がいるんですよ。「あれ？何、もう片付けに来たの？」って疑問に思いました。道路は木で塞がれていたので木を避けてきたのに。その時は動転してるから何もわからなかったです。そして、避難所に戻って、もう一回来てみると、またいたんです。「あれ？ どうしたの？」って言って、そっちも動転してるから何も言わないの。おかしいと思って聞くと、逃げ遅れたんだって言うんです。「ばあちゃんがいて運べないし、車も津波でやられたから、もうどうしていいか分かんないんだ」って言うから、「じゃ、今、助け呼んでくるから荷物そろえて準備してて」と言いました。川の堤防を走って行ったら上流で消防団が遺体捜索やってたんですよ。「生きてんのが3人いるから、とにかく迎えに行ってくれ」、消防団の人が「この道通れるのか？今、救急車持ってくるから」と言ってくれて助けてもらいました。福浦小学校に戻ったのが朝の8時頃かな。そしたら、携帯で浪江の人と連絡がついて、浪江の人が避難しているらしいっていう話になって。「津波終わったのに何で避難するの？」って聞いたら、「何か原発が危ないらしいよ」って言ってたんですよ。「ああっ、原発あったな。近いよな」と思いました。そしたら昨晚、僕の同級生が夜中に、「俺、今から行かなきゃなんないところだから、これからうちの家族頼むわ」って言って出てったのを思い出したんです。そいつ

は原発の中の下請けで管とか作っている会社の専務なんです。そういう関連事業をやっている人たちが呼ばれて、私たち住民には秘密で対処をさせられてました。言わないでそのまま行ってました。福浦小学校って原発から大体 12 キロか 13 キロぐらいなんです。原発危ないんだったら近過ぎるからちょっと離れるかってことになって、人がいるところの方がいいだろうということで小高工業高校に行った。体育館には津波の被災者が何千人か集まってましたから。車でラジオ聞いてたら、午前 11 時ごろでした。放射性物質を原発の容器の中から出す「ベント」という作業をするっていうニュースが流れてきた。「これはやばいな」と思いました。僕ら、原発ができる予定だった 20 代の頃、散々勉強会やってたんですよ。そこでは、「もし原発事故が起きたら、半径 300 キロが壊滅する」とか、「その外側が高濃度汚染地帯になるから最も苦しむのは大体横浜ぐらいだ」とか、「そうなった時に住める場所は、九州と北海道の先っぽぐらいだ」とか、そういう情報を学んでいた。避難する時も人間が放射性物質になるから国は逃がさない。自治体と一緒に逃げたら途中で止められるから、逃げる場合はもう家族単位で逃げられるだけ逃げろと言われていたので、これはちょっとでも遠くに避難のゴール地点を置かなきゃなんない。小高工業高校はまずいから、もうちょい外。ガソリンのこともあるし、どっちに逃げたらいいかも分からなかったから、とりあえず、その南相馬市の職員に「ベントするから、この辺の人たち避難させた方がいいよ」と言ったら、「いや、避難命令が出てないんで、私たち動けないんです」って。それで「俺ら行きたいんだけど、どこに避難すればいいの？」と言ったら、「原町の小中学校の体育館はみんな準備してありますから、そちらにどうぞ」って言われたんで、石神中学校の体育館にとりあえず行きました。でもそこにいた人はもう仙台に向かって逃げ始めていました。

それでまたラジオ聞いてたら、1 号機が夕方に爆発したんですよ。その時、ちょうど娘が大学卒業の年で、仙台に卒業式の準備に行っていました。それで娘にたまたま携帯がつながって、「危ないから来るな」って言ったのに、何を言われてるか分かんなくて戻ってきちゃったんですよ。13 日の朝に 3 号機も危ないというラジオの放送があったので、もうちょっと遠くに行かなきゃなんないなって思って、さらに北の相馬市のアリーナってところに避難をしました。

★3.13 寒さの中での避難「俺たちが責任取るから」

三浦：相馬アリーナは良かったですよ。イチゴの差し入れはあるわ、成田もやしっていうもやしの会社もやしをたくさん持ってきてくれて、玄関に山になってて。それを近所の方が炒めて差し入れてくれたりして、非常にいい食生活だったんです。いいところに避難できたなと思ってたら、夕方 4 時に、「ここは相馬市民の避難所なので南相馬市民の方は出ていってください」って言われて、8 年前に廃校になった相馬女子高校に集められました。そこは暖房もなければ下もコンクリートで、そこに寝ろって。4

時ごろにみんな集められたので寒いわけですよ。雪はぱらぱらと舞ってるし。どうするのかなと思ってたら、足立区から毛布がいっぱい送られてきて。その毛布を配るのかなと思ってたら、相馬市の職員の人が「これは夜の7時になったら配ります。避難者がいっぱい来ると足りなくなると困るから、今いる人には配りません」って言うんだけど、みんなぶるぶる震えてるわけ。着の身着のまま来てから。だから、相馬市役所の職員にもういい加減にしろと。彼らだけストーブにあたってるんですよ。もうしょうがないからとにかく配ってくれってお願いしたら、「私たち責任取れませんから」って言うから、「俺たちが責任取るから」って言って、僕とすごく怒ってたおじさん2人で開けました。次から次へ毛布は来るんですよ。だから足りなくなるはずがない。だけど、そういう判断ができない。もうしょうがないからみんなでやって、とりあえず1人3枚ずつ勝手に配って、3枚敷いて寝てみました。体育館の床では背中が痛いし、冷たくて。コンクリートの上にブルーシート1枚ですから。もうこれじゃ駄目だと思った時に、東京で路上生活している人は段ボールを敷いているというのがぱっとひらめいて。毛布より段ボールが大事だということ、足立区から来た箱全部開けて、とにかく各部屋に段ボールを配ってそれを敷き詰めてもらって、その上に毛布2枚敷くともうあったかいんです、空気の層があるんで。13日の夜はそんなことをやりました。

—その日の夜は、(旧)相馬女子高校に泊ったんですね。

三浦：廃校だからトイレがないんです。外に仮設トイレを3つぐらい置いてましたが。それで、僕らは1階に寝泊まりしていたんだけど、翌日に市のバスに乗っけられて避難してきた人たちって高齢の人が多いわけですよ。それがみんな2階とか3階に上げられちゃって、トイレのたびに両肩抱えて上り下りしなきゃなんなくて大変な状態なのを見ていたんだけど、僕も寝たきりの親父を抱えていたのでさすがにちょっと「代わりますか」とは言えなかったから、なるべく早めに次に行こうと思ってました。ただ、16日までやっぱ動けなかった。携帯の電話が繋がらなくて、どっちに行ったらいいか分からないのよ。

★3.18 福島市渡利が高い線量

三浦：16日に携帯がつながるようになったら、親戚からば一つと着信がいっぱい入ってきて、早く来いという電話が来た。「途中の道も大丈夫だから来いよ」っていう情報が入ってきたので、伊達市の月舘ってところに行くことにしました。後から聞いたら、すごい線量の高いとこだったんですけど。行った先は農家だったので、米はあるんだけど他のおかずがないんですよ、食べ物がない。川俣に買い物に行くんだけど、店が全部閉まっているので買えない。仕方ないからフキノトウとか山菜を採って食

べました。そこが汚染されてるって知らなくて食べてたわけです。みんな「おいしいな」とか言って食べてたんだけど、実は線量が高くて。18日、福島市渡利がすごい高い線量だということを知りました。テレビ見た瞬間、正直何か埋まっていたんじゃないのって思ったくらい驚きました。これってすごい高いレベルなので、やっぱり福島も危ないなと思いました。それで、娘が就職先を決める時に東京の小金井市にアパートを借りてあったので、とりあえずそこに行った。東京で、福島県以外の情報も仕入れてやろうと思いました。

★3.19 東京へ出発

三浦：19日の朝に、高速道路にタンクローリーが来るというニュースが流れたので、出発しました。途中でガソリンがなくなると困るけど、そういうのが来るんだったら大丈夫だっていうことで、郡山のパーキングエリアに寄って。そこで「いや、少ししか来ないんだって、那須まで行った方がいいですよ」って言われました。それで那須まで行ったら2,000円分入れてもらえました。みんな少しずつ分けるんで2,000円分以外は入れてくれないんです。これで東京に何とかたどり着けそうだなと思って東京の小金井に行きました。小金井の借りたアパートが市役所のすぐ裏だったんですよ。なので、日曜日だったので市役所の駐車場に勝手に停めて、守衛の人に、「福島からの避難者なんですけど、ここに停めていいですか」って聞いたら、「どうぞ、どうぞと。」色々しゃべってたら、紙1枚に避難者第1号って書いて、「これ、車の前に置いてください」と言われて、次の日に見舞金を5万円頂きました。そして、そこはさすがに1週間も置けなかったんだけど、小金井公園っていうのがあって、「小金井公園に避難者用の駐車場作りましたから。だから、そこに車置いてください」って言ってもらいました。それと、「CoCoバス（小金井市コミュニティバス）っていう100円で市内ずっと回れる循環バスがあるので、それで用足ししてください」って。だから結構停まってましたよ、避難者用の駐車場。

—東京での生活のエピソードを教えてください。

三浦：（避難）生活は2カ月続きました。その間、所属している農民運動全国連合会っていう農業団体に3月21日に行きました。とにかく色々交渉しなきゃならないから、農水省との窓口をアポ取ってくれってお願いをしたんです。そして、24日にアポ取れて第1回目の農水省交渉をやりました。その時僕は、農民連の本部がある池袋に行って、ガイガーカウンターで（放射線量を）測りました。15,000ベクレル相当あったんです。東京で測ってもなかなか取れないデータと言われました。15,000なんて大したことないんですけど、やっぱりちょっとショックでした。マイクロシーベルトで言うと0.7ぐらいなんです。その後、「こんな危険なものを、着て中央線と山手線

を乗り継いできたのか」と怒られ、放射能の原子力マークが書かれた袋に服を入れられて、「じゃ、これ置いてっていいのかな？」って聞いたら、「いや、こんな危険なもの、ここに置いていかれると困るから持って帰ってくれ」って言われました。何なんだ、一体って思いながら、1万円渡され、「これはもう返さなくていいからその辺で上着買ってきてくれ」と言われました。袋に入った服など持って行って、武蔵小金井の駅前のクリーニング屋に出し、きれいになって戻ってきました。ちょっと被ばくしたかもしれないですけどね。だから、洗うと落ちるんだって思ったので、駅の向かいの家電屋さんに行って洗濯機を買って、こっから（福島から）持ってったものは、全部洗いました。

★3.24 農水省と一回目の交渉

三浦：24日に農水省と交渉始めたら、水素ガス爆発ぐらいで終わりそうだという話になったんです。じゃ、農水省の職員に「俺と一緒に南相馬市に行って復興の計画立ててくれよ」とお願いしました。そうしたら、「いや、私たち国家公務員は、福島のような危険なところには行ってはいけないことになってるんです」って断られました。それ、俺に言うかって思いました。最初は握手してくれて「三浦さん、生きてたんですね」って目を真っ赤にしながら言ってくれた職員も、結局行けないって話になりました。しょうがないじゃないですか。本来は逃げ出す予定だった私は、東京から大阪への移動を考えていました。産直でつながってたので、そこだったら何とかなるかと思って。最悪の場合は九州と北海道の先っぽしか生きていけないわけだから、とりあえず日本にいれば九州だろうと考えていました。4月にはフランスに住みませんか提案されました。「ブドウ畑用意してますから」みたいなこと言われて。なかなかいい話でした。

★東京での生活

三浦：とにかく、東京での生活はまず放射能を落として、それから農水省と交渉をして、福島が何とか戻る気になれば戻れそうだということになってきました。その間、4月4日に相馬に農産物供給センターの仮事務所を開設しました。うちの職員が残っていたので、電話が来るようになりました。東京にいたら、毎年営業に行ってた大体80店舗ぐらいお米屋さんから電話来るんですよ。その人たちに「東京にいるならおいで」って言われて、行くとカンパがもらえるんですよ。一番多いところで60万。全部合わすと200万ぐらいもらったかな。「これで復興に頑張ってくれ」みたいなこと言われるわけです。農家から電話が来て「今年は米売れんのか？」って聞かれました。「避難しないのか」と聞くと、若い人たちは山形とか新潟に避難したけど、もう年だから

今更避難していると疲れるから避難しないって言うから、「いつもと違うことをやると、ぼけたり体にガタが来たりするから、いつもと同じように農作業してたほうがいいよ。」って言うと、「米は売れるのか」って聞くんです。「売れるかどうか分かんないけど、とにかく俺が全部売り切るから作っていいよ」っていう話をして作ってもらいました。あんなにカンパくれたから売れると思うじゃないですか。買ってくれるんじゃないかと思うじゃないですか。ほぼ全部断られました。唯一、北千住の業務用米専門のお米屋さんがうちのお米を全部買ってきて売ることができました。個人や産直組織との関係も全部断られました。何しろ安全で安心でおいしいお米っていうのを売りにして僕らはやってたので。だから、もうそういうところは軒並みやられましたよね。今は米売れるようになってますけど、でも、安全志向の人たちにはなかなか受け入れられないですね。もうこの10年以上で他とつながっちゃったじゃないですか。他の安全、安心でおいしいお米作りの産地の人たちも一生懸命やってますから、その人たちとつながってしまうと、こっちに戻ってきませんよね。これを風評被害といいます。米は、今13,000円ぐらいまで上がってますけど、少し前まで60キロで1万円切っていたんですよ。僕が以前、アイガモ米で60kg、7万円の米売ってました。普通の消費者直販向けのお米は3万円ぐらいで売っていたけど、それが売れなくなっちゃったわけです。そのため、今は3分の1とか7分の1の値段でしか売れない状態です。なので、農家は今、赤字になっています。果物農家も同じで、農協に出したり、市場に出していたりすると、儲からないです。その分を自分で販売したり、直売所に出したりすることで、利益になります。しかし、福島の場合はこの部分がまだ回復していないのが現状で、厳しい状況です。

—東京にいらして戻られたのはいつですか。

三浦：戻ったのは2カ月後です。でも、戻ったというよりも、ずっと毎週通ってたんですよ。まずは自分の家族、親戚のところに置いてきた家族をどっかに避難させなきゃならないわけですよ。だから、避難先を見つけては戻り、連れていきました。犬もいたので、人っ子一人いないような農業法人の研修所にじいさん、ばあさんを避難させたり、犬も連れて行ったりしました。親戚や息子の友達、新潟に避難した人を連れてきたり、そこで就職をさせたり様々な動きをしていました。また、相馬の事務所に戻って状況を聞いて、市役所などと話をして、また東京に行って農水省や東京電力行ったりして、こういう状況だからこういう政策出してもらえませんかみたいな話をしたりを毎週繰り返してました。そして、5月30日に（南相馬市）鹿島区に仮設住宅ができたんです。そこに申し込んで、父と母も一応メンバーに入っていたので、優先的に入れてもらえるっていうことになり、5月30日に入居しました。夫婦2人だけはとにかくこっちに戻ってきて、相馬に行ったり、その後はこちらから東京に通うようになりました。

—小高と東京ってこういう感じですね。

三浦：そうなんです。4月26日に東京で、千葉県から借りた牛を連れてデモンストラーションを行いました。東電が何もしてくれなかったので、東京の本社の前で実施しました。その後、東電との交渉が始まりました。以前は全く応じてくれなかったのですが、それ以降断られることはなくなりました。実力行使って大事ですよ。だから、いまだに週に3~4回は電話来ますよ。

★震災で大変だったこと

—震災後、大変だったことを教えてください。

三浦：この辺一面、田んぼだったのです。この周りにちょっと岩が削れてるところあるじゃないですか。以前あそこには家が建ってました。あと、海のそばの家は40軒ぐらいあったんですけど、それは津波で全部流されちゃったので。だから、もう無理だよねっていうのが大体皆さんの総意でした。だから、2016年7月に避難指示が解除になって住んでもいいよって言われても、集団移転元地で南相馬市が買収しましたし、津波の危険区域なので家建てられないんですよ。だから、もう戻るという選択肢はほとんどないし、今もこの状態（何も無い状態）ですから。2014年ごろ、ここどうするかと県から問われた時も、僕は、海に戻してはどうかという提案したんです。だけど県が、もう海の近くの排水機場は、国からの予算がついちゃってて、ここは農地に戻す以外ないからどうしても駄目だと。そう言われても、「誰もやんないよ」と言ったのですが、県としては、他から事業者を連れてきてでもやるという意向でした。ところが2016年に避難指示解除になったら、今度は県から「できませんでした」と言われ、やっぱり地権者でやらなきゃならないということになってしまいました。

—どのようにして解決したんですか。

三浦：2015年にあそこ（もともと三浦さんの家があった西迫地区）に、復興のためということで宅地とか農地に市と交渉して太陽光パネルを並べました。みんなが賛同してくれたんです。その1カ月ぐらい後に、110haの土地を僕と浦尻地区の人で分けました。（三浦さんは63ha）この土地は、工事は国がやってくれます。地権者や土地を持つてる人たちが180人いましたが、事務経費っていう2%の自己負担金約7,500万から9,000万かかることになったんです。僕はもう既にここで太陽光をやったので、儲かることは分かっているわけですよ。そこで、交渉して、自己負担金がゼロになりました。その他に復興特区の農地のメガソーラーは、1メガワット当たり100万ずつ県に寄付することになっていました。復興のためにといい名目でやってるので、寄付されることになっていて、そのうちの半分を農業の再開に使わせてねという交

涉したら OK ってことになったんです。ここ 27 メガワットなので、毎年 2,700 万円
ずつ 20 年間寄付されるわけですね。その半分、毎年 1,350 万ずつ 20 年間、私た
ちがここで農業をやる時に使えるお金です。そういう交渉を事前にやっといたので、
設備費や機械代の初期投資に使えています。

4. 半農半エネ

—ソーラーパネルによる発電と農業を組み合わせた半農半エネをどういうきっかけでその
方法を思い付かれたのですか。

三浦：実は、僕が思い付いたわけではなく、千葉の人がやってたんです。最初は太陽光発電
を普通の農地や宅地で始めましたが、農業じゃないから農地には駄目だったんです
よ。そこで、雑種地や山林など、農地以外の土地に太陽光パネルを並べていました。
山林では、自然破壊になり、土砂崩れの問題も考えられます。そうなりとやっぱ農地
ですよ。農業をやれば農地でありながら発電ができます。

日本の農業は SDGs に逆行していると外国から批判されてますから、土地の利用率
もいいし、一番合理的にできる方法でみんなが Win-Win になる方法を模索していっ
たら、半農半エネがいいよねっていうことになりました。この農地は現在工事中で、
まだ出来上がってなくて誰のものか分からない状態です。将来的に、この農地が、誰
のものかが決まれば私ができるところは全部やろうかなと思っています。これから
日本で太陽光発電広げていくためにはどうしたら良いか考えた時に、一番合理的な
方法ということで進めています。

最初は GE（ゼネラル・エレクトリック社）の風力発電所の建設話がありました。
GE のアジア地区の社長が綿花の種まきに来たんですよ。結局、ハトのレースを行う
人がバードストライク（鳥類が人工構造物に衝突する事故）や環境破壊になるからっ
て反対して実現しませんでした。この時、GE の人が「地域貢献」っていう言葉を俺
に教えてくれました。地域で農業と再生可能エネルギーを組み合わせ、それで得ら
れる収益で農産物を販売するアイデアが生まれました。ところがそれが駄目になっ
たので、代わりにメガソーラー造ったわけです。その時に、そういう地域貢献の話を
覚えてたから、「じゃ、ここ代わりだから地域貢献のメガソーラーできないか」と提
案しました。これは、非常に Win-Win の関係で、利益は少なくなるけど、福島を応
援する会社のポリシーはすごい評価されるようになります。評価は海外との貿易を
やってる企業にとってはすごい大事なことです。再生可能エネルギーと農業、地域の
コラボをどうするかっていうのが大事です。

これをきっかけに、GEの人が風力発電の規制を緩めようと思ったのか、GEの紹介で河野太郎さんのスタッフの人に、30分レクチャーさせられました。農業を含む地域と再生可能エネルギーをどういうふうに関連付け再生可能エネルギーで得られたお金をどのようにして地域に投資していくか、そういうのをレクチャーしました。河野さんが3日後ぐらいにほぼ同じ内容を大臣発表してました。そういう意味でもソーラーシェアリングは重要だと思います。

将来的には電気エネルギーは自給自足の方向に行くと思っています。今、ペロブスカイト太陽電池が実用化されそうなんですけど、折り曲げたり変形したりしても普通に発電できるやつです。しかし、日本の研究者が開発したんだけど、今はもうそこに国の投資があまり行かなくなっているらしくて、外国のほうがどんどん進んでるんですよ。だから、日本は最初の発想はいいんだけど、そこに国が投資しないから残念です。

—その現状について、どう思われますか？

三浦：ほんと悲しくなっちゃうよね。何で、政治家って先見の明がないんだろうって思います。例えば東京だったらビルの壁も、窓も、屋上も、全て発電所になるわけです。あとは停電しないシステムさえ構築できれば、地産地消で失われない電気ができるでしょう。今の発電・送電システムは大規模な発電所から長距離を運んでいくので、抵抗があり、ここで発電したものは、東京に行くまでどんどんなくなっていくわけです。ものすごい量を発電しなきゃならないけど、短い距離を送る分には雑音もノイズもないし。停電しないようにコントロールさえすれば全然問題ないです。

毎年、横浜のみなと未来や東京ビッグサイトで開催されている再生可能エネルギーの世界展示会で6~7年前に、清水建設が八重洲口の2つの町内会で実施した実験が報告されていきました。技術的にはもう確立されて、うまくいったって報告してました。この10年間で技術はもうどんどん変わっています。農業もそうです。だから、今の技術を活用したイノベーションが求められていて、知識は貪欲に取っていく必要があります。僕も12年ぶりに農業始めましたが、復興や組合員の農業のバックアップばかり携わっていて、農業技術の進歩に気が付かなかった。本気になって農業やろうと思ったら、もう技術が全然変わっていて、まさかドローンとロボットでやるようになるとは思わなかったです。

★小高で半農半エネを行う理由

—なぜ、小高で半農半エネを行おうと思ったのですか。

三浦：太陽光発電所は、2011年から津波でできた借金の返済のために始めました。2013年から野馬土でもやり始めました。活動するにはどうしても財源が必要です。今、うち

の職員の給与財源はほとんど太陽光で賄えてます。事業が軌道に乗るまで時間かかります。電気代や保険代とかお金もかかります。まだ収入がないうちは太陽光発電をやっていると事業がスムーズに進みます。それで太陽光発電を始めました。東日本大震災当時、FIT（固定価格買取制度）ができ、最初 42 円/kw、次が 36 円/kw でした。今はもう 10 円/kw ですから当時の FIT はかなり儲かります。当時は設備費が高かったんですけど、今の設備費は FIT 制度によるスケールメリットで下がっています。今も利益率はほぼ同じです。だから、再生可能エネルギーの発電所を設置すれば財源にしているいろんなことができるなというふうに思いました。

農地も、農地を他の用途に使うことは農地法があって普通はできないんですけど、福島県は復興特区として太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーをやる場合、それが復興の役に立つと市長が認めると、できるようになります。南相馬市の復興整備計画に位置付けるよう市に申し入れました。最初は担当者がすごいごねてたんです。市長にも直談判して、認めていただいたんですけど、復興担当課長が私の目の黒いうちはさせませんとか言うわけです。課長は当時、日立とか東芝がやる事業は事務局ってその人たちがやってくれるから楽にできたんだけど、市民がやると市職員が忙しくなると思ったらしく、とんでもない話だって言ってたんです。しかし、市民がやることで市にお金が残るわけじゃないですか。固定資産ができ、どんどん蓄積していかなきゃなと思えばさらに働きかけたんです。野馬土でも太陽光パネルを全員避難した金谷地域にいっぱい並べました。そういう形で太陽光発電をやりながら、農業と復興が進めていくことになりました。

—少しずつっていう感じですね。

三浦：そうです。だから、2011 年からスタートして、2015 年で野馬土や復興地での発電所が完成しました。その後、電気の産直が始まりました。野馬土は BEAMS と電気の産直やっています。日経新聞には「日本で初めての電気の産直。野馬土とビームス」といった記事で載りました。BEAMS の他に、カラダファクトリー、LUSH（せっけん屋さん）、ZOZO が参加しています。また、ソーラーシェアリングには RICOH と大阪の不動産会社であるタイセイシュアサービスも参加しています。そういうところとのつながりができると、彼らもここをネタにして、Zoom での会議で、これはどういうふうに解釈したらいいんですかとか、復興のために何やったらいいですかっていうコミュニケーションを取ることもあります。そういう意味でも、何かやるとそれに付随していろいろとできる。まずや何かやる。

—いつ避難指示が解除されるかもわからない、浸水の影響も不透明な中で、いずれは小高で農業を再開するつもりでしたか。

三浦：全然思ってたかったです。だから、さっきも話した通り 2015 年まではもう捨てた土

地です。とりあえずこっちも新地町に農地も借りたり買ったりして、相馬に農業法人やNPO法人立ち上げました。避難先で生意気に復興支援やってるわけですよ。地元の人たちの復興組合も農水省との交渉でできて、うちの組合員の土地で、農業ができるまで、ちゃんとお金が回るような仕組みを作りました。市とか新地町でも、僕たちがやるとその何か月後かに同じことをやって、ノウハウは農民連に聞けという形でスタートしました。

ほんとに相馬新地は、津波ですごくやられた場所も、2年で90%以上の農地が元に戻りました。自分たちで水路や田んぼの形を整え、草刈ったりがれき拾ったりすると、ここが壊れてるとかここが平らじゃないとかってというのが自分で分かります（こうした情報を）相馬市に伝えると、市が国に上げ、すぐ工事が始まる仕組みです。行政だけに任せてしまうと、復興って進まないんですよ。行政の人がだーっと見て回って大丈夫かな、みたいだね。時間がどんどん過ぎていく中で自分が関わって問題がどこなのかって言うのを言っていくことが大切です。僕が東京に通ってるのとおんなじですよ。それがやっぱり復興のスピードを速めるのにすごい有効だなんていうふうに思いました。

2012年8月ぐらいに小高区井田川の水がなくなりました。実は2011年の3月11日の午前中に、国会で再生可能エネルギーが日本で推進法が決まりました。その後、津波が来て原発事故が起きたわけです。これはチャンスなわけですよ。津波で浜通り農産物供給センターの8,600万円のお米流れちゃったので、その返済資金として太陽光パネルを農家の土地や組合員の屋根に置くモデル事業を経済産業省に申請しました。また、二重ローン対策として、金融機関から借りてた借金を買い取ってもらい、一時的に棚上げしてもらって言うのを申し入れに行きました。しかし、現行の制度では、非営利は2~3割でしか買い取れないことが分かり、その後、当時野党だった自民・公民党が提案する予定の二重ローン対策法案に期待し、農水省に行って金融担当を呼んでもらいました。金融担当との話で、制度の問題点を金融庁に伝えて、それを制度化したのが東日本大震災事業者再生支援機構でした。現場からの声をちゃんと上げてるから、ちゃんとやると事業が成立するんですよ。その制度ができて、うちの農業法人が認定第1号になりました。今まだ返してますけど、5年間据え置きでその後10年間で返す。15年で終わるっていう制度を作っていただきました。

5. 交渉の原動力

—交渉で最も苦勞されたことは何ですか。

三浦：昔は、減反政策があり、米作っちゃ駄目だよっていう政策でした。僕が 38 歳ぐらいの時、農水省に飼料用米の制度の提案をしました。僕、大学が畜産科で豚の研究をしていて、当時は鶏も飼ってたんです。その時、「餌にして使えば主食用米と分離できるからいいよね」と考え、それを農水省に話しました。農水省の方は、「じゃ、ちょっとそれ制度化してみます」と言われましたが、次に行った時に「できました。ただ、これ WTO 違反なので」って言われました。日本は生産を刺激する政策は取るべきではないと解釈をし、これが WTO 違反だと。他の国はそんなことしてないんですよ。WTO の議論（自分の国の農業を守ることは公正な貿易を阻害する）が、下火になった時にその政策が表にでました。これにより、民主党政権になる前の 2008 年ぐらいに飼料用米の制度ができました。その当時日本中で、「米を家畜に食わせるとは何事だ」って言って、生産者レベルでうわーっと大騒ぎになりました。だから、当時は俺が提案したって言えなくて。でも、自分ではちゃんと 1 年目から飼料用米に取り組みました。制度開始後、35,000 円の補助金が出されましたが、これでは所得としてペイしないので、農水省に「何で 35,000 円にしたのか」と聞きました。答えが「秋田の養豚農家でモデル事業をやったら、周りの農家が 3 万円で喜んで作ってくれたんです」とのことです。僕はそれに対し、「それは米用の機械が同じで、原反制度があるから喜んでくれているけど、所得として比べた場合、主食用米よりも所得が高いものを作らなければ誘導政策として成り立たないでしょう」と説明し一覧表を作って主食用米なら所得幾ら、飼料用米なら幾ら、それから加工用米なら幾らとか、具体的に説明するべきだと提案しました。

3 カ月後、また別な交渉に行った時に、「三浦さん。これできました。幾らだと思います？」と言われ、「俺は 10 万以上だと思うね」と答えました。「そうなんですよ」って言うわけですよ。「10 万以上だったら、当時の主食用米の所得と同じぐらいになるけど、今年は主食用米以外で一番率のいいのが加工用米なので、加工用米のレベルだと 8 万円ぐらいなんですよ。今年は 8 万円で勘弁してください」って言われました。その後、収穫量に応じて 55,000 円から 105,000 円までの幅をつけました。取れる品種を使って一生懸命作ったら 105,000 円、これなら主食用米とペイしますよねって言う逃げ道を農水省が必死になって模索をしました。農水省も財務省との交渉になるので、「いや、いい政策いっぱい準備してあるんですけど、財務省が「うん」って言うてくれないんですよ」っていう愚痴をよく聞かされました。

★「交渉の原動力は課題を解決したい気持ち」

—交渉の原動力や、基にあるポリシーみたいなものがあったら教えてください。

三浦：交渉せずにはいられないです。目の前に課題があるじゃないですか。例えば、放射能の安全性確保する必要があります。僕は農家としてのプライドを守りたいと思う、そ

のためには全部測らないと。国が提案するサンプル検査じゃ話にならず、県との交渉が始まりました。県は「そんなのできるわけじゃないですか」と言っていたんだけど、東大の先生たちが提案する測定機械はMRIと同じシステムでそれほど難しくなくできるんだと教えてくれました。こうして、アイデアがどんどん出てきて、僕の知らないところでも進んでいってくれてました。その重要性が問題となります。僕は、自分の幸せを守るためや周りの人たちが困っていることに対処することが課題になります。その課題をクリアする方が、僕自身も元気になり、周りの人たちも元気になります。我慢してることはマイナスのエネルギーで、ため込むことはないと考えています。家族からは、「あなたはいいかもしれないけど私たちは大変なのよ」ってよく言われますけど、それをため込まない。問題解決をしていけばため込まないで済むので、どうやったら解決できるかを考えます。解決策は、個人だけではなく、行政や東電、他のいろいろな会社も含めて、みんなで協力すれば良くなるという考え方です。こうすることで、みんながWinになることが期待されますが、例えば、ロボットトラクタを購入する際も、「これって南相馬市にとってプラスになるよね。これやんなかったら、南相馬市の今のロボットを中心にやっていくんだっていう姿勢見せられないよね」といった姿勢を示すと相手もその通りだと納得するでしょう。そうすることで、どんどん変わっていくじゃないですか。

東電などは、最初は、絶対駄目ですと言っていたのが、半年ぐらい交渉した後に、コロっと変わって、「それ、大丈夫になりました」という結果が頻繁にあります。国の政策や東電の方針は、普通は覆せないじゃないですか。でも、それを覆した時の快感。それがみんなのためになり、少しでも明るくなる。人間のエネルギーはこういう時に、一番発揮されると僕は思っています。その快感から逃れられない。中毒ですかね。

—震災後の交渉や東電との折衝で対立関係になることが多い状況でも、話術とコミュニケーション力を駆使して対話を進め、お人柄を活かして、トークで課題を解決しているんですね。

三浦：だって、それ一番楽じゃないですか。得意技じゃないですか。というか、子どもの頃からずっとそれしかやってないわけですから。

—趣味はしゃべることですものね。

三浦：やっぱりそこは発揮しないわけにいかないですよ。これで世の中が変わるわけじゃないですか。大学院の同級生とかに、「何で三浦さんは政治家にならないんですか」って言われるんだけど、皆さんは政治家に期待し過ぎですよ。政治家っていうのは、権力闘争をするのにあらゆるエネルギーを費やしている人で、それで勝ち残った人が上に行く。あの姿を見てると、あんなところで、俺のエネルギーを擦り減らしたく

ないな。だってできるんだもん、やりたいことは。別に自分たちの周りを変えていくこともできるし。

僕、農民連をつくりはじめた 26 歳の時、「日本の農業守るんだ」って言い放ったんですよ。だから、日本の農業を守るために必要なものは何かっていうのをずっと考え続けて、いろいろ交渉とかもしてるんだけど、人と人との関係とかそういうのってあんまり関係ないんです。とにかく猪突猛進じゃないけど、僕は農業というカテゴリーで日本の未来を創る。自由貿易とかどうでもよくて。日本の国の中で日本の農業をちゃんと維持、継続させてやっていくっていう、僕がおいしいものを食べたいっていう最初の理想を追求するために、そこをやっぱり外したら駄目なんだけど。これって誰も反対できない理念なんです。AI とかそういうのは別に人間の生存には不可欠ではないけど、食べ物だけは尽きたら滅びるわけだから。だから、そういう意味ではそれをベースに持っていて、負けるっていう要素は何にもないですよ。

これ全部、社会づくりにも何でもつながってきます。そういう意味ではやっぱ農業です。「半農半 X」、これ一番大事なことです。農業をやっているからこそ、他の課題。僕の大学時代の友達で電子科行ってたひとは、コンピューターのプログラマーやるんですよ。大体 30 歳ぐらいで精神的に参って一回うつになって、運送屋さんになったりしています。あれってもう本当に集中するじゃないですか。普通の人の人間の脳はそういうふうにはできてないんです。だから、農業を傍らに置きながら他の仕事をやっていくっていうことは、宙に浮かない。生活感とか、例えば自動車造るにしても、AI 作るにしても、やっぱ農業っていうのがあると、生物としての基本っていうものを心のここにちゃんと持っていられるので。だから、みんなに「半農半 X」をお勧めしています。僕は、「半農半 X」の「X」はしゃべることなので。しゃべって交渉していろいろなことを積み上げて準備をすることが好きで、あとは半農だから農業をちゃんとやっていく。そこをちゃんとバランス取りながら生きていくのが、私にとってが一番適しているのかなと思っています。

6. 今の日本農業

三浦: 農業をやってる人はどんどん減っています。20~30 年前までは 300 万人いましたが、今 100 万人切りそうなんです。専業農家もどんどんいなくなり、以前は 1 ヘクタールが平均面積でした。今ここ 60 ヘクタールですから。今、日本の農地の 60% が 30 ヘクタール以上の経営になり、大規模化が進んでいます。しかし、大規模経営の農業技術やシステムを作らなきゃなんないんだけど、そこがうまくいってないのが課題です。農家の平均年齢は 68 歳で、国はその人達をどう引退させるか政策を検討して

います。僕としてはもう 68 歳で定年しようがどうでもいいわけですけど、20 歳代や 30 歳代の人達が農業を経営していけないのが困ります。だから、僕は若い人たちの経営を守るための新しい政策を農水省に提案しています。

—そこにつながってくるんですね。

三浦：そうなんです。日本の農業を守るために必要な交渉を常に行っています。ほんとは高齢者をやめさせる政策はもう必要ないのに、政府は高齢農家のほうを向いて政策出してらっしゃるのが問題です。

—人口も多いですからね。

三浦：そうなんです。だから、原発と同じ。もう原発なんて終わってるのに、システムとしてもう過去の遺物です。だから、早く再生可能エネルギーにどんどん国の予算を使って投資し、最先端の技術をみんな日本で提案して積極的に育てていくべきですよ。しかし、そこを育ててこなかったことが最悪ですね。今の日本の政治家は先を見る力がないなって感じるのそこなんですけど。でも、まだ気が付いてない。まだ権力闘争に明け暮れてるからです。

おととしの 12 月に農水省と交渉した時に、今どこに予算使おうと思ってるのかって聞いたんですよ。そしたら、所得補償、価格保障にはもうやる気がないと。これは高齢者にかかるコストを減らすためです。だけど、基盤整備には金出すと。今はこれが重要です。基盤整備に金を出させればコストが下がり、結果として農家の所得が上がるわけですよ。しかし、やるっていうなら徹底的にやれよと思いますね。例えば、新しく新規就農する人にはすべてをやらせてほしいですね。国が最初から大規模経営に取り組める投資をし、そこで農業を始める。ただ、これ、(農業をやるときに)機械使うの大変なんです。その技術をちゃんと大学とか高校とかで教えなきゃなんないわけですよ。つい先日、福島大学のみらいホール(食農学類研究棟大講義室)で、大阪とか福島の高校生と懇談し、その中で、農業高校の先生が「今、機械教えないんだ」って言ってました。

7. 農業の未来

—農業高校では機械の使い方を教えないのですか。

三浦：カリキュラムにないため教えられないんだそうです。例えば、ロボットトラクタがどうなってるかとか、知らないと日本の農業できないわけですよ。うちの農業法人の組

合員で一番大きいのは、今 90 ヘクタールです。規模が大きいところは（農業機械が）必須なわけです。しかし、それを教える学校がない。ここが問題だなと思っています。

この前も小学校の先生と懇談する機会がありました。「皆さんに聞きたいんだけど、あなたたちの児童の中で将来農業をやりたいって人いますか」って、そういうことを教えていますかって聞いたんですよ。そしたら、教えてないどころか思いもしなかったって。田植えの交流とかはテレビで報道されていますが、あれはもう 40 年、50 年前の農業です。そんなのやらせてたって、こういうロボット使いながらやるんだとか、夢のある話ってできないじゃないですか。こういう話ができるように、ちゃんと教科書に載せて、実際に先端技術を駆使している農家に連れてって、こういうもんなんですよっていうのを小学生のうちから見せれば、やりたい人って結構増えるんじゃないかなと思うんですよ。将来の職業として、農業を考える人が上位 20 位ぐらいには入れたいですよ。そうしないと日本の国つぶれちゃうから。

今も新規就農者が農業を始めて、収入が少なくて生活できないから皆 5 年ぐらいで辞めていくんですよ。投資してもらえないから、例えば、ビニールハウス建ててキュウリ栽培しても、全然所得にならないですよ。本人は好きでやってるから良いとしても、家族ができると生計が難しくなります。農業をやる場合は少なくとも 600 万から 1,000 万の所得があって、それで子どもに大学行かせられて、家を 20 年に一遍は建てられるというぐらいのちゃんと所得水準じゃなければ、農業なんか持続可能じゃないじゃないですか。そういう農業にしましょうよってというのが提案で、これは多分できると思うんですよ。スイスは農業所得の 100%以上が税金ですよ。ドイツやフランスも農家所得の 8 割から 9 割が税金です。農家に国の食糧を作ってもらって国民の食を支え、国は税金によって農家の生活を支えているんですよ。

—スイスは農家に食料を作ってもらおうという考え方ですか。

三浦：そうそう。EU の前身の EC ってあるじゃないですか。あれって共通農業政策を作るために作ったシステムでしょ。農業がなくなると国が成り立たないから。僕、35 年前にヨーロッパ各地回った時に、みんなどの国も口をそろえて言っていたのは、食料自給率 100%を割ったら、スイス以外、首相は交代です。それだけ食料政策が大事で、フランスなんか農家がトラクタで高速道路封鎖するんですよ。それをフランスの国民にどう思いますかって聞く。すると、あれだけ農家が怒ってるんだから、それは政府が間違った政策やってんだっていうふうに答えるんです。シャンゼリゼ通りのごみ箱の中、みんなで火付けて歩きますから。それぐらい、ちゃんと食料を生産するっていうことの重要性を分かっているわけですよ。

ところが、作れるのに作らない。守れるのに守らないっていう国は、先進国の中では日本だけなんです。これ、特殊な国なんです。その状態を平然と当たり前のように

思ってるじゃないですか。食料自給率 38%だとか穀物自給率 20%だっていって平気でしょう。これ、普通だったら考えられない。だから、今、輸入農産物、肥料、農薬買えなくなってきました。同じように、円安もあって食料が買えなくなってきました。小麦も買えなくなってきたり、ものすごい高くなったり、大豆も買えなくなっているし、肉も駄目ですよ。本当に買えるものがどんどん減ってます。世界では、人口爆発に合わせて緑の革命で、肥料と農薬をばんばん使って食糧増産をしたわけですよ。その爆発に合わせてやったんだけど、そのおかげで土が全部駄目になっちゃって、今、表土流出がものすごくてミシシッピ川は真っ茶色だそうですよ。作れるところどんどん減ってきてます。だから、もうこの政策は駄目。さっき、日本で化学肥料と農薬使えないって言ったけど、世界的にそうなっちゃったんです。今度は、オーガニックや草地栽培、有機とか、そういうのをやってかなきゃなんなくなっちゃってます。でも、日本ではみんな気が付かないでしょう。でもそれは僕が主張する話ではなくて、世界では当たり前なんです。でも、日本では常識ではない。ここに問題があるなと思っています。

8. 震災によって影響されたこと

—震災・原発事故があって影響されたことはありますか。

三浦：なければそのまんま。(農業をしていた。)震災があって暇になりました。震災と原発事故で農業できなくなっちゃったじゃないですか。だから、震災とか原発事故がなかったら、農業部分でそれずっとやってたと思いますけど、しかし太陽光発電や他の色々なことに取り組むようになり、目の前の課題をクリアする交渉は、多分農水省だけとやってたと思うんです。福大もよく言うように「福島は課題先進県」で、あらゆる問題に取り組んでいます。例えば、農業や太陽光、高齢化などは全国共通の課題で、食料が輸入できなくなるとか温暖化とかは世界共通の課題です。今までは目の前のことだけでほんとに精いっぱいやってたんだけど、それがはっと一歩引いて見た時に、これだけでは、解決に繋がらないことに気づきました。

例えば、農業だけやっても農業問題を解決できないんだとわかったわけですよ。つまり、日本のお金、エネルギーや食の流れなんかがそうだけど、色々な問題があった時に、一つひとつ解決策を見つけて、できる範囲で提案し、実践する。これが全体の解決に繋がることが分かりました。そうすると新しい課題も見えてきます。だから、(震災があって)良かったなとは言わないですけど、僕にとってはもっと(これまで気づけなかった)新しいものがわかりました。日本の農業を守るのは農業分野

だけじゃなく、日本全体を変えないと守れないんだっていうことがよく分かりました。

—震災があったことで一步引いて見る時間や目が養われたんですね。

三浦：そうです。いろいろな場で交渉を行いました。交渉するからには Win-Win になる提案をしなきゃなんないけど、東電は Win になれない企業です。会社の体質ですね。僕がこれ問題だよねって言って交渉すると、受け入れられるまで大体 1 年から 2 年かかります。福島に来ている現場の人の意見を反映するように言うと、東電の本店の人はやりますって言います。だけど 2 か月後は何も聞かなくなります。本当にそういう意味ではリスク高いです。経産省の資源エネ庁にも、「東京電力は再建するよりも、もう一回ちゃんと廃炉の問題とか、発電の問題、売電の問題、そういうのをちゃんとできるような会社をつくり上げたほうがいいんじゃないの？」と言っても、「いや、実は、廃炉をするためには東京電力という看板が必要なんです。東京電力にも経産省にももちろん廃炉の技術はないんです。関連企業が開発をするためには、その元締めとなる東京電力っていう名前が必要なんです。だから、これは存続させるしかないんです」って私に一生懸命熱く語るわけです。責任逃れしてるだけだろうとか思っちゃいますけど。現状は、そういう意味で東京電力が延命をさせられているので、社員のモチベーションは至って低いです。平均年齢 52 歳超えたそうですから、なかなか大変そうですよ。

9. 処理水問題

—いろいろな考えや政策が飛び交う中で、処理水についてどう感じていますか。

三浦：処理水って、汚染水って言ったり処理水って言ったりするじゃないですか。どんなものか分かります？分かんないよね。原子炉があるじゃない。そこに地下水とか雨水とかが底にたまるわけ。ふたがないっていうか、凍土壁も 3 割、4 割ぐらいはもう止められなくてその原子炉のところに入ってきて。トリチウムだけではなくて、いろんなものが混ざるわけじゃないですか。核物質がいっぱい入る。五十何種類とか言ってみましたけど、それが入ってきて、くみ上げて、フランス製の ALPS という処理する機械に通すとほとんどのトリチウム以外はほとんど取り除けるっていうふうに言ってるんだけど、トリチウム以外も結構残ってます。でも、おおむね水とトリチウムだけのものが 3 割あるんです。7 割はごちゃごちゃ。だから、東京電力が言っているトリチウム水で捨てられる条件のあるものは 3 割しかないんです。この 7 割をもう一

回 ALPS にかけてもっときれいにするって言うてるんだけど、それもきれいになるかどうかは分かってないんです。いい条件のものだけきれいにして 3 割まで来ているから、40 年かけて捨てるんですけど。その 3 割は捨てられますけど、残りの 7 割は未知数。みんな思ってるのは、東京電力が今はその 3 割を捨ててるけど、ひょっとしたら台風の時とかそういう時に 7 割の分も混ぜて捨てるんじゃないとか、みんなそう思ってるわけですよ。東京電力、さっきも言ったとおり、信用できる会社じゃないから。国も内緒でこそこそやるじゃない。つまり、処理水問題で何が問題かっていうと、国と東電の姿勢です。国と東電が信用できれば誰も文句言わない。原発が稼働していると、トリチウムは常に海に出続けているなんて、僕ら知らなかったじゃないですか。でも、今回処理水の問題が起きたことで、原発って動かすだけでトリチウムっていう放射性物質が出てるんだ、あんなに出てるんだっていうのが分かったわけですよ。だけど、その他のものもあるから、また内緒で何かやるんじゃないのかって。この前、処理水問題で、駅の北側にあるアオウゼ（福島市アクティブシニアセンター・アオウゼ AOZ）で、東電との懇談やるから来てくれって言われて、僕も行ったわけですよ。この日の懇談で、その理論はおかしいよねっていう風に言って、「名前なんっていうの？」って聞いたら、司会が「今回は、東京電力の社員は名を名乗らないことで来てもらっています」って。賠償担当なら、名前を名乗って、名刺を交換するのが普通だよな。それなのに、処理水問題となると、名乗らない。経産省の担当も zoom で説明していたんだけど、その時は画面真っ黒。これを見て、丁寧な説明をされているように思いますか？そういうところが信用できないところなんですよ。

僕も聞いてびっくりしたんだけど、いわき市で説明会やった時に地元の人が納得しないもんだから、東京電力の社員が「あんたたちは、これをやらせないんだったら、電気は要らないんですか」って言ったそうです。「おたくの電気使ってませんけど」って言いたいんですけどね。別に、いわき市や福島県は、東北電力なんで東京電力の電気は一切使っていません。けども、そう言っちゃうわけですよ。やばいでしょう。そんな話を賠償担当の部長に「おい。昨日聞いたんだけど、いわきでおたくの社員がこう言ってたらしいぞ」って言ったら、「申し上げる言葉がありません」って言ってきました。つまり、公害の問題としては、薄めて流しても原因物質は変わらないので、薄めて流すことに意味がないと思うんです。東京電力や国の独自の理論で、世の中では通用しない理論なわけです。本当に処理水がきれいかもしれないけど、それが安全だっていう保証もないわけです。原発で常に継続しているものと同じものかもしれないけれども、ほんとにそうかもしれないけど、それが安全だっていう保証もないわけですよ。原発からずっと出続けているものだって、海の生物に影響を与え続けているかもしれない。でも、IAEA（国際原子力機関）の基準内であるからと言って、安全であるかわからない。何を何年調査したの？っていう話になっちゃうんです。

だからこれは、自分たちがどう思うか、感受性の問題になってくるのであれですけ

ど、処理水については信用できないっていうのはそういうことの積み上げがあって、何一つ僕らがこれだったら安全だよって思える情報がないです。それだけの話ですよ。だから、僕らがいくら反対しても流すわけじゃないですか。こんなに安全だったら、大阪が受け入れるって言ってんだから、タンカーで大阪まで運んで投げたらいいじゃんって思うじゃないですか。別に福島県沖に投げなくてもいいじゃん。タンク1個ぐらい持っていけばいいじゃん。そんなに安全だったら公海に持っていけばいいじゃん。でも、福島県なんですよ。そこら辺も、僕らは常にずっと言い続けてるんですよ。最初にそれが発表された時に東京電力から NPO 野馬土に説明に来ました。普通だったら全部解決されて、農業問題とかも何一つ滞ることなく解決されていくわけですよ。でも、東京電力は何一つ解決されないまま、そのまま時間がたっていて、質問にも答えられない。この前のアオウゼのやつで質問するじゃないですか。質問に全く答えられないんですよ。自分の主張だけずっと言い続ける。残念ながらそういうのは対話じゃないし、説明でもないし。だから、そういうのを見てると信用できないよなと思っちゃいます。

よく知ってください。処理水って何なのかとか、今どういう状況なのかを。これ、原発の問題だけじゃなくて日本の社会全体です。知っていて初めて対処ができます。知らない人が貧しくなっていくんだよね。知らないことがいっぱい毎年できますけど、それは知っていて当たり前なので、知らないことが罪なんですよ。日本の法律は知っていて当たり前という立て付けで決まっています。だから、新しい法律全部を知れとは言いませんけど、自分に関わることや、おかしいなと感じたこと。おかしいと思ったらそこは突っ込んでいけてうちの職員にも言うんだけど、前うまくいったから今回もうまくいくなんてと思ったら大間違いだよと。自分の感性を大事にして、それを信じる。おかしいと思ったら、そこをちゃんと調べればなぜおかしいと思ったのが分かってくるから。そうすると新しい知識がどんどん入ってくるから、それで自分が豊かになる道ができる。今、日本の社会ではそれ以外に豊かになる手立てはないので、知ることですよ。知った上で解決策を見つけるっていうか、作るっていうかね。

—県や国が避難指示っていうのを直接自治体には出してない。住民の人たちが自分たちで情報集めて判断して、危ないかもしれないから逃げようとなるんですよ。

三浦：これを安全神話っていうんですよ。原発は安全なんだ。だから、避難計画を立てる必要がない。避難計画なんか立てたら皆さんに不安を与えるでしょ。だから、避難区域もそうだし、避難訓練もしないし、大熊町と双葉町は地元だから東電でバス準備してみんな乗せて、西に向かえって言うわけです。どこに向かえじゃないんですよ。

—最初は半径3キロのところから、避難、屋内退避だったのが、10キロ圏内、20キロ圏内と

いうように。広く範囲を取って縮めていくっていうのが世界的には普通ですよ。

三浦：僕らがやったのはそれですよ。東京にまず逃げてって。

—三浦さんを紹介していた本を読んで（「福島のおコメは安全ですが、食べてくれなくて結構です」2015年 かもがわ出版）10年後、20年後、自分の孫世代の人たちが共有してくれることを思っているっていう文章があって。今はどのように思われているのか教えてください。

三浦：うん。そのまんまですよ。変わってない。未来につながる場所であって欲しいし、日本の農業守るっていうテーマで、俺、26歳ぐらいからずっとやってきてるから。ここは僕のエリアじゃないですか。少なくともここが安全な状態であることだったり、今の最先端の技術使うことです。昔は有機って大変だったんだけど、12年経ってこんな技術があるんだったら、十分に大規模経営で有機できるよね。そこの田んぼ、無農薬の米です。多少、周りに草は生えてるけど、でも十分採れます。そういう技術をちゃんと農機具メーカーが作って機械化し、システム化し、それさえ使えばできるようなものになってきています。それが今の技術じゃないですか。でも、5年先、10年先はまた変わるかもしれない。

さっき、高校の先生の話をしたけど、県の職員もみんな追い付いてないです。だから、農家や農業やりたい人が今の最先端のことを勉強して、次の時代の農業をちゃんと作れるようにする必要があります。それを行うのは子どもや孫だったりするわけです。そういうふうなものにしていくためのことを、そこ（本）に書いたとおりに僕は今実践しているつもりです。



10. 若者へ伝えたいこと

三浦：世界を見ながら日本のことを考えてほしいと思って、今の大人は現在の社会を作ってきた人たちだから頼りない。彼らの経験を聞いて物事を判断したり、作っていくのはすでに時代遅れになっています。だから、自分たちで何が大事か、例えば国連が掲げている SDG s の 17 の目標を一人も取りこぼさず達成すればみんなが幸せになるというけど、そのためには何が必要か、困らないように生活するにはどうすればいいかっていうのを考えて行動して一つひとつの課題を達成するのが大切だと思うので、自分から発信して周りの人と議論してどうやったらうまくいくのかっていうのをやってほしいな。それが楽しく生き生きと一生を過ごせることになるかな。僕も周りを気にせず、ずっとやってきたので、今幸せです。お後がよろしいようで。

【学生の感想】

震災を経験してもなお闘い続けた三浦さんのお話を聞くことができ、大変充実していました。三浦さんの行動力や、考え方、価値観は、学習を重ねる私にとって大きな影響を与えてくださいました。ご教授いただいた様々なことをこれからは活かしていけるよう励んでいきます。

行政政策学類 1 年 平井胡桃

3 か月に及ぶインタビューを通して小高区の震災当時の状況やこれまでの復興の軌跡を直接聞くことができ、内容の濃い時間を過ごせました。特に印象に残っていることは、半農半 X を私たちの生活に取り入れることで生命の営みを身近に感じながら生活を豊かにできるということです。今回の活動をもとに、これからの学習に生かしたいです。

共生システム理工学類 1 年 照井楓真

農業から政治まで多岐にわたる三浦さんの見識の深さに驚かされました。また、何度も訪れるうちに小高についてもっと深く知ることができました。様々なお話を聞き、自分の目で復興の軌跡を見たことで新しい視点を持つことができたと思います。今回の経験を今後の学習や課題解決に役立てていきたいです。

食農学類 1 年 小池美輝

課題を解決するためには、知識と感性の組み合わせが解決に繋がる重要性や個々の行動

が社会全体に影響を与えられる力があることを学びました。一番印象に残っている事は、知識や法律、社会の仕組みに対する興味と理解が、自分の豊かさや課題解決への一歩に繋がるということです。今回の経験を基に、新しい一歩を踏み出していきたいです。

食農学類1年 樋口沙梨